

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00038

研究課題名（和文）色とその知覚的クオリアの存在論的身分に関する包括的な哲学的理論の確立

研究課題名（英文）Establishing an Inclusive Philosophical Theory for the Ontological Status of Color and Qualia

研究代表者

篠原 成彦（Shinohara, Naruhiko）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：60295459

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：色は直感的には全くリアルであるにもかかわらず、物体や光がもつ物理的な性質ではない。また、色を感じるという経験をもたらしている我々の脳の中にも、色を見いだすことはできない。そのため、色はどうすれば科学的世界像のうちに位置づけられるのかということが、長らく問題となっていた。本研究はこの問題の解決に資することを目指したものであり、物理主義的なアプローチを探りつつも、昨今の物心二元論の展開をも視野に収めることで、包括的な色の存在論的理論への一つのステップをなしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

色を感じるという身近な現象が実は謎に満ちたものであることを示すとともに、科学的な世界の捉え方には不備や限界があると安易に決めつけることなく、謎を解く手だてをあちこちに探るといふ、世界を理解することに対する冷静な姿勢を提示した点に、学術的意義と社会的意義を認められうるものと思われる。

研究成果の概要（英文）：In spite of those intuitive reality, colors are not physical properties of bodies or rays. And we can't find colors in our brains which generate color experiences. So it has been a problem how color can hold a position in the scientific world image. Our research was aimed at contributing to the solution of this problem, and made a step toward a comprehensive ontological theory of color, not only with a physicalistic approach, but also with a consideration to recent development in mind-body dualism.

研究分野：哲学

キーワード：色 クオリア 物心二元論 エネルギー保存則

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

デカルト、ニュートン以来、物理学を中心とする科学的世界観のうちに色を位置づけることの困難さは、科学者・哲学者の間で頻りに指摘されてきた。しかしながら、いまだに決着を見るには至っていない。その主たる要因は、我々には色という性質が存在するようにしか感じられないという逃れがたい事実と、色にいわば居場所を与えない科学的な世界観との決定的な「折り合いの悪さ」にある。求められるのはこの「折り合いの悪さ」を解消することだが、これを目指す包括的な研究は、日常的に事物の性質として語られる色と、知覚における主観的体験としての色、すなわちいわゆるクオリアとしての色の説明を組み合わせるかたちでなされねばならない。以下、これら2つの面について、それぞれ研究開始当初の学界の状況 現時点でも基本的には変わらない を整理しておこう。

事物に帰される色について

事物にその性質として帰される色について、哲学者たちが採ってきた見解は、

- ・ 知覚者に相対的な事物の傾向性（機能的役割）であるとする(cf. Cohen 2009、
- ・ そうした傾向性の実現基盤をなす事物の物理的性質であるとする(cf. McLaughlin 2003)、
- ・ そうした傾向性にもその実現基盤にも還元されえない性質であるとする(cf. Campbell 1993)、
- ・ 色を事物に帰されるリアルな性質とは認めない(cf. Maund 2006)、

という4つのタイプに大別することができる。

クオリアについて

心の哲学においては、かねてより、五官による知覚や痛みや痺れなどの内的感覚における意識への質的な現れとされるもの、すなわちいわゆるクオリアの存在論的身分が問われてきた。この点についての哲学者たちの態度は、

- ・ クオリアの物理主義的な還元可能性を探る(cf. Tye, 2000)、
- ・ クオリアを既知の物理的事象には還元できない自然界の要素として新たに承認する(cf. Chalmers 1997)、
- ・ クオリアの存在そのものを認めない(cf. Dennett 2005)、

という3つのタイプに大別することができる。

2. 研究の目的

本研究では、上記の「折り合いの悪さ」の解消に資するべく、色とその知覚的クオリアに関する包括的な哲学的展望を、以下の[a]・[b]・[c]を満たすかたちで与えることを目指した。

[a] 心的な諸事象を物理的ならざるものとはしない、心身論における物理主義。

[b] 事物に帰される色を知覚者の心に生じる<内なる色>が環境に投影されたものとする、色についての投影主義。

[c] 知覚者の<内なる色>の候補とみなされているクオリアなるものは端的に存在しないとす、クオリアについての消去主義。

[b]は上記1における の、そして[c]は の であり、[a]はこれらの背景をなしている。

3. 研究の方法

[a]+[b]+[c]という本研究が目指すヴィジョンに対抗する立場には、[a]・[b]・[c]のいずれを共有するかに応じてさまざまなタイプがある。その中でも本研究では、[b]のみを共有するものである物心二元論、とりわけ、我々の身体に生じる物理的事象と非物理的とされる心的事象 まさにクオリアがそれである との間因果的な影響関係があるとす相互作用的二元論の検討に力を注いだ。というのも、相互作用的二元論は早くからエネルギー保存則に抵触すると指摘され、そのためほとんど顧みられない状態が続いていたのだが、近年になって、この指摘そのものへの疑義が活発化してきたためである。

ただし、こうした相互作用の物心二元論の考察への集中は、研究開始時から意図していたものではなかった、ということ認めざるをえない。研究の初年度にあたる平成30年度は、上記[a]の論拠、および[c]の部分的な論拠として、クオリアを非物理的事象として存在するものとするかぎり、いわゆる相互作用的二元論を採ることは免れえず、そのためエネルギー保存則に抵触しないとは考えにくいということの論証に取り組んでいた。だが、この作業を進める中で、相互作用的二元論はエネルギー保存則に抵触しないと主張する哲学者たちの近年の議論を精査した結果、彼らの言い分は少なくとも慎重な検討に値すると判断するに到った。そのため、令和元年度からは、予定を一部変更し、改めて、そうした相互作用の物心二元論の近年の動きに対する批判的検討に取り組むこととなった。もともと予定していたスケジュールを遵守するとしたら、この時期は上記[b]および[c]の細部を具体化する作業へと進むべきであったが、この批判的検討からどの

ような結果が導かれるかによって、[b]の内実が大きく左右されることにも、また[c]の論拠が崩れることにもなりかねないため、こうした部分的変更は避けられないものであった。

4 . 研究成果

平成 31 年には、3 に述べた相互作用的二元論についての吟味を、より大きなコンテキストの中で遂行し、論文「科学的思考と心、自由、そして罪：2018 年度科学論講義より」(信州大学人文学部編『人文科学論集』第 6 号、平成 31 年 3 月) 3-4 章において公にしている。

さらに、令和 2 年度には、従来の「定説」に反して相互作用的二元論はエネルギー保存則に抵触しないとする主張される研究者たちの論証 (cf. Montero2006, White2017) に対する否定的評価に到達し、中部哲学会 2020 年大会シンポジウムにおいて、これを報告した。さらに、この報告に基づく論文を、令和 3 年度刊行予定の『中部哲学会年報』第 53 号に寄稿する権利を与えられている。

文献

- Chalmers,D.J., 1997, *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford University Press. (林一訳, 『意識する心 脳と精神の根本理論を求めて』, 白揚社, 2001.)
- Campbell,J., 1993, 'A simple view of colour', in John J. Haldane & C. Wright (eds.), *Reality: Representation and Projection*, Oxford University Press.
- Cohen,J., 2009, *The Red and The Real: An Essay on Color Ontology*, Oxford University Press.
- Dennett,D.C., 2005, *Sweet Dreams*, MIT Press. (土屋俊・土屋希和子訳, 『スウィート・ドリームズ』, NTT 出版, 2009.)
- Maund,B., 2006, 'The Illusory Theory of Colours: An Anti-Realist Theory', *Dialectica* 60 (3).
- McLaughlin,B., 2003, 'the place of color in nature', in *Colour Perception: Mind And the Physical World*, Oxford University Press.
- Montero, B. 2006, 'What Does Conservation of Energy Have to Do with Physicalism?', in *Dialectica* Vol. 60.
- Tye,M., 2000, *Consciousness, Color, and Content*, MIT Press.
- White, B. 2017, 'Conservation Laws and Interactionist Dualism', in *The Philosophical Quarterly*, Vol. 67.
- 篠原成彦 2019, 「科学的思考と心、自由、そして罪：2018 年度科学論講義より」, 信州大学人文学部編『人文科学論集』第 6 号所収.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 篠原成彦	4. 巻 第6号
2. 論文標題 科学的思考と心、自由、そして罪：2018年度「科学論」講義より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学人文学部編『人文科学論集』	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 篠原成彦
2. 発表標題 相互作用的二元論の巻き返し？
3. 学会等名 中部哲学会 2020年度大会シンポジウム「物心二元論の行方：心身問題の再検討」（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------